

『無量寿経』にみられる天女

西村実則

現存する『無量寿経』のどの漢訳本にも極楽に天女がいるという記述はみられない。しかしながらサンスクリット本には極楽のそれぞれの宮殿に天女が七千人いるとある。漢訳とサンスクリット本との相違をどうみるか。また大乘仏教には女性は一度男に成らなくては成仏できないという考え方があり。してみると、往生者は全員男ということになり、極楽の女は天女だけなのであるか。

バラモン文献にみられる天女

『カウシータキ・ウパニシャッド』に天女について次のようにあるのはすでに再三指摘されている。

五百人のアプサラス（天女）たちは彼のほうに向かって行く。百人は抹香を手にし、百人は香水を手にし、百人は果物を手にし、百人は豪油を手にし、百人は花鬘を手にして。

あるいは『マハーバータ』に登場する天女はこうである。

同様に、魅力的な天女やガンダルヴァたちが、さまざまな舞踊、器楽、歌、娯楽によつて、神々の王インドラを楽しませている。

グリターチー（略）マドゥラスヴァラー、及びその他の天女たちがここで踊っていた。蓮花のような眼をした彼女たちは、大きな腰と尻をし、揺れる乳房で、ながしめと媚態と甘美さで心と理性を奪い、シッダたちの心をかき乱していた。

これによれば、天女は踊りをよくし、奉仕をし、妖艶、官能的であげくの果ては人の理性をかく乱する存在とされる。

仏典にみられる天女

原始経典の『長阿含経』『世記経』には天人天女について珍しい記述がみられる。

天に十法あり。何等を十法となすや。一には、飛去に限度なし。二には、飛来に限度なし。三には、去無礙なり。四には、来無礙なり。五には、天身に皮膚骨体筋脈血肉あることなし。六には、身に不淨大小便利なし。七には、身に疲極なし。八には、天女は産まず。九には、天目は眇せず。十には、身は随意色なり。青を好めば則ち青、黄を好めば則ち黄、赤白の衆の色意に随つて現ず。此は是れ諸天の十法なり。

（天人には十種のありかたがある。十のあり方とは何か。一に、限りなく遠くまで飛んで行けること。二に限りなく飛んで来れること。三は、障害なく飛んで行けること。四は、障害なく飛んで来れること。五は、天人の身体には皮膚、骨、筋肉、血管、肉がないこと。六は、大便、小便などがないこと。七は、身体に疲労がないこと。八は、天女には出産がないこと。九は、天人は瞬きをしないこと。十は、身体の色を自由にでき、青を望めば青、黄色を望めば黄色、赤白などの色に思うままできること。これが天人にみられる十のあり方である。）

これによれば、天人天女は人間のような肉体がなく、飛行の力だけがあるといえる。理論書の『立世阿毘曇論』によると、天の世界には池があり、その池には無数の花が咲き、船があり、天人天女たちがその花を採ろうとすれば花のほうから近づいてくるといふ。

其の中には男女の諸天ありて船に乗りて遊戯す。是の時、宝船は心に随つて遅速なり。男女の諸天の若し是の意を作さく、「願はくは彼に向はんと欲す」と。船は即ち彼に到る。是の諸天等の若し是の意を作さく、「願はくは彼の花を取り

たし。来つて我所に至れ」と。花は便ち自ら至る。⁶

あるいはまた天人天女があい交歡するさまも次のように認められる。

是の時、外林の中の一一切諸の花は開敷・鮮榮するとき、諸の女天等は音楽・謳歌す。時に諸の天子は歡喜園より、林に出でて觀聽す。諸の天子等の外林の中に於て音楽・謳歌すれば、園内の女天も亦出でて觀聽す。園内の女天は又音楽を奏すれば、外の諸の天子は園に入りて觀聽す。園内の天子も亦音楽を奏すれば、園外の女天も亦園に入りて聽す。此の因縁を以て諸の戲樂を受く。⁷

これは歡喜園とあるように帝釈天の世界の紹介であり、音楽に携わる天人天女についてふれたもの。

『大毘婆沙論』には經典からの引用として次のものがみられる。

契経に説くが如し、「尊者無滅の、一林中に在りて、樹下に宴坐するとき、初夜の分を過ぎて、四天女あり、皆、悦意と名け、端嚴殊妙なり、尊者無滅の座前に来至して、合掌恭敬し、双足を頂礼して、退いて一面に住し、尊者に白して言く、我れ等四天女は、能く四処に於て變化自在なり。一には、欲に随ひて種種上妙の色身を化作し、諸の相愛する者にたいしては、我等、皆能く歛娛して承事す。二には、欲に随ひて種種上妙の衣服を化作し、三には、欲に随ひて種種上妙の花香・飲食・珍翫の浴衆の具を化作す。⁸

これによれば、天女はいわば変幻自在であり、欲するままに衣服、アクセサリ、花香など願わしいものを創りだせるという。

仏教詩人といわれる馬鳴の『サウンダラナンダ』はブツダが異母弟ナンダを出家させることを主題とした物語である。ここではブツダはナンダを妻から引き離すために、天の世界（具体的にはインドラの世界）に連れて行き、天女と妻との美貌を対比させる。天界の天女（アプサラス）は次のように描かれる。⁹

そこでは前世に苦行という代価を払つて天を購しようとして心定めずくれた苦行者の疲れたところを天女は遊戯して楽しませる（10—33）。

このインドラの森をナンダは驚きに眼を見開いて隈なく見れば、よろこびに溢れた天女たちが自負に充ちて互に見守りつつ闊歩せり。

（アプサラスたちは）常に若く、愛欲を唯一のなりわいとし、福善をなす諸天に共通する快樂であり、また天上に属し、交わりて過失なく苦行の結果のよりどころである。

彼女たちのある者は声高く、堂々と歌った。またある者は戯れて蓮華を裂き、また他の者は互いに喜んで舞い、美しく肢体を動かして胸で胸飾りを破つたりする（10—35、36、37）。

昇る太陽の光が闇中の光を滅するように、アプサラスの壮麗さは人間世界の女性の美しさを滅ぼしてしまう（10—44）。

ここでは天女の美貌は人間の比でなく人を誘惑し虜にになってしまう存在として描かれる。これは『マハーバーラタ』などのバラモン文献にみられる天女と酷似する。

『華嚴経』「十地品」には天女が仏陀を讃えた言葉がみられる。

天の諸の姝女等は、各清妙なる音を以て、同声に仏を称讃したてまつりて、是の如きの言を説けり、「世尊の久遠より来、勤苦して求めたまふ所は、無上の正真道にして、

今に於て始めて乃ち得たまへり。天人を利益する者は、久しくして乃ち、釈迦牟尼仏を見奉ることを得ん、今日の宮に至りたまふ。久遠より已来、大海の相始めて動き、久遠の無量の世より、今に乃ち妙光を放ちたまふ。衆生久遠よりして、今始めて安樂を得、久しくして乃ち方に、大慈悲の德音を聞くことを得たり。諸の功德の岸に度り、久遠にして今乃ち、聖王に働ひたてまつり能く悉く、きょう慢我心等を破る。無比にして恭敬す可く、而も今供養したてまつることを得、能く諸天の道を開き、一切智を得しめたまふ。世尊は甚だ清浄にして、無量なること虚空の如く、世法に染まらざること、蓮華の水に在るが如し。世に処して最も高大なるは、猶ほ巨海の中の、須弥大山王の如し、是の故に歎喜して礼したてまつる」と。是の如く諸の天女は、各衆妙の音を以て、敬心に歌頌し己り、黙然として仏を觀たてまつる。¹⁰

これはブツダがさとりを開いたために人びとは安樂が得られ、煩惱を滅することが可能となった。そうして一切知者・清浄にして広大なかた（ブツダ）を讃嘆したものが

生天して天女となる事の出来た女性がブツダに感謝することばが『雜宝藏経』には認められる。天の世界で帝釈天が天女に問い、それに答えたことばが三つの話に認められる。

六十五話

天女偈を以て答えて言く、

我昔人中に在り 少しの甘蔗を以て施せしに

今大果報を得 諸天衆の中に於て

光明甚だかがやき赫たり

これはわずかな甘味を施しただけで大いなる果報が得られ、いま天の世界で輝くことができたというもの。

六十六話

天女偈を以て答えて言く、

我れ上妙の香を以て 最勝尊を供養せしに

無等の威徳を得 三十三天に生じ

而も大快樂を受け 身より衆妙の香を出し

百由旬にも聞え 諸の香を聞くを得る者

悉く大利益を得るなり

これは香をブツダに供養したために、この上ない功德が得られ、三十三天に生まれ、大いなる楽しみを享受でき、自分も香を嗅がせて、それを嗅いだ者に安樂が得られるようにしたいというもの。

次もやはり天に生まれることが出来た天女のことば。

六十七話

三界の堅勝は 能く生死の苦を抜き

三界の真済は 三垢の結を断除したまへり

我昔 仏并に法僧に帰依したてまつり

三界の主たるブツダは苦を抜き煩惱を断ち切っておられる。わたしは以前に仏法僧に帰依したために生天という果報が得られたという。

是の因縁を以ての故に 此の果報を獲たるなり¹⁾

これらはいずれも女性が生天後、天女となり得たことをブツダに感謝したものである。

サンスクリット本『無量寿経』

漢訳の『無量寿経』類には新古の差があるが、現存するサンスクリット本はその内容からして新しい部類であることははっきりしている。最も古いものは『大阿弥陀経』であり、それ以後暫次、敷衍化されていった。それゆえサンスクリット本の経末「流通分」に、

それゆえ深いころざしをもってこの法門を聞き、受持するために、体得するた

『無量寿経』にみられる天女

めに、詳しく説くために、また実行するために、いと大いなる精進につとめなければならぬ。たとい一昼夜でも、一度の乳しぼりのあいだの時間でも、(この法門を)書物に書きとめておいて、良く書き写して持つていなければならない²⁾。

とあるくだりもいづれの漢訳にもない増広された部分である。漢訳本にないものは、それぞれのもとになったサンスクリット本にも存在しなかったとみてよいであろう。原本にないものに単語の付加あるいは繰り返しでない限り、漢訳者が省略することはないと考えられるからである。むろん新しいサンスクリット本で説かれるくだりといえどもインドの浄土教徒の手に成るものである。その結果、浄土教徒の構想する理想国土としての浄土にはバラモン教の場合と同様に、おのずから天女がいると解されたのであろう。

大乘にみられる転女成男の思想

阿弥陀仏のまします極楽浄土に生まれる場合、女性は一度男にならないと往生できないという考えかたがある。この考えは大乗仏教にことのほか顕著であり、すでに指摘されているように、『法華経』や『無量寿経』に認めることができる。『法華経』の場合その「提婆達多品」に、八才の龍女の成仏するありさまが次のように説かれる。

爾の時、龍女に一宝珠あり。価、三千大千世界にあたいす。持して以て仏に上る。

仏すなわち之を受けたもう。龍女、智積菩薩・尊者舍利弗に謂いて言はく、「我れ宝珠を献す。世尊納受したもう。是の事疾なりや不や」。答えて言う、「甚だ疾(はや)し」。女言う、「汝の神力を以て我が成仏を觀ぜよ。復たこれより速やかなり」と。

時に当り、衆会皆、龍女の忽然の間に變じて男子と成りて、菩薩行を具し、即ち南方の無垢世界に往きて、宝蓮華に坐し、等正覺を成じ、三十二相八十種好あり。

普く十方一切衆生のために、好法を演説するを見る³⁾。

これは龍女が仏を宝珠を布施したことが機縁となって男と成り、修行して成仏したことを伝えている。

次いでサンスクリット文『無量寿経』では、

もしも世尊よ、わたしがさとりを得た時に、あまねく無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏国土における女たちが、わたしの名を聞いて、清く澄んだこころを生じ、さとりに向かう心を起こし、女人の身を嫌ったとして、(この世での)一生を終えて再び女の身を受けるようであれば、その間はわたくしはこの上ない

正しい覺りをさとりません。たとい我れ仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界に、其れ女人ありて、我が名字を聞きて、歡喜信樂し、菩提心を發し、女身を厭い悪（にく）まんに、壽終えて後、復た女像とならば、正覺を取らじ。¹⁴

とある。この願はもつとも古い『大阿彌陀經』にも、

第二願。某をして仏とならん時、我をして国の中に婦人女人あることなし。我が国の中に來生せんと欲せば即ち男子となる。（略）是の願を得ざれば、終に仏とならず。¹⁵

とあるから、当初から存在した本願であり、いずれも極樂に女性は男と成つてから成仏するよう誓つたものである。

往生人は天人と成るのか

ヒンドゥー世界では死後、生天し天人天女となるというが、極樂往生を説く浄土教以外の大乗仏教の場合はどうか。この点を見る上で『法華經』をみてみよう。この經典には三通りの死後の世界およびそこへの往生が説かれる。その一は、「藥王菩薩本事品」にみられるもので、『無量壽經』の場合と同じ極樂往生である。

宿王華よ、もしまた女性がこの法門を聞いて把握し、受持するならば、まさにその（生涯）が、彼女の女性としての最後の生存となるであろう。宿王華よ、のちの五百年に、だれかある女性が、この『藥王の過去の因縁』の章を聞いて、（その教えのとおり）修行するとしよう。実に彼女はここから死んで、極樂世界に再生するであろう。ここでは正しいさとりを得た尊敬さるべき世尊の阿彌陀如來が、菩薩の集團にかこまれ、おられ、身を保たれ、時をすごしておられるのである。そこで、その人は蓮華のなかの獅子座に坐つて再生するのである。

若し女人有りて、この藥王菩薩本事品を聞きて能く受持せば、この女身を尽くして後に復、受けざらん。若し如來の滅後、後の五百歳の中に、若し女人有りて、この經典を聞きて、説の如く修行せば、ここにおいて命終して、即ち安樂世界の阿彌陀仏の、大菩薩に圍繞せらるる住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生まれん。¹⁶

ここでは往生した人をそのまま「人」とする。

第二は、「普賢菩薩勸發品」にみられる三十三天への往生である。

世尊よ、この經典を書写し、受持するであろうものは、私に喜びを与えたことになるでしょうし、世尊よ、この經典を書写するものも、その意味をさとるものも、

彼らはこの經典を書写する（だけ）でも、ここで死んでから、三十三天の神々の一員として生まれるでしょう。生まれるやいなや、彼らのもとに八万四千の天女が近づいてくるでしょう。天子となった彼らは、大鼓ほどもある宝冠をつけて、それら天女たちのまんなかで暮らすでしょう。

無量無辺の諸仏の所において深く善根を種うれば、諸の如來の手をもつてその頭を摩でらるることをえん。若し但、書写せば、この人は命終して当にとう利天の上に生まるべし。この時、八万四千の天女は衆の伎樂を作して、來りてこれを迎えん。その人、即ち七宝の冠を着て采女の中において、娛樂み快樂ばん。¹⁷

これは死後三十三天に生まれることを説き、そこに生まれた人は天人となり、天女とともに暮らすことになるという。

第三は、同じく「普賢菩薩勸發品」にみられるもので、やはり天界の一つ、兜率天への往生である。

彼は悪しき境涯において苦しみの生をうけることもなく、この世で死んでから、トウシタ（兜率）天の神々の一員として生をうけるでしょう。そこにはかの弥勒菩薩大士がいて、（偉大な人物のもつ）三十二のすぐれた相をそなえ、菩薩の集團にとりかこまれ、幾百・千・コテイ・ナユタもの天女によつて崇められて、教えを説いているのです。ですから、良家の子らよ、良家の息子でも娘でも、賢者ならば誰でも、この「正しい教えの白蓮」という法門を敬虔な態度で書写し、敬虔な態度で教示し、敬虔な態度で誦誦し、敬虔な態度で心をそぐべきなのです。若し人ありて、受持し誦誦し、その義趣を解らば、この人命終するとき、千仏は手を授けて、恐怖せず悪趣に墮さざらしめたもうことをえ、即ち兜率天上の弥勒菩薩の所に往き、弥勒菩薩は三十二相ありて大菩薩衆に圍繞せられ、百千万億の天女の眷屬あり、すなわち中において生まれん。¹⁸

これら三種の來世のうち、三十三天、兜率天に生まれた者はいづれも天人となるといふ。

「上善人」（良き人）という在り方

極樂には天女以外に「上善人」(sapurusā) がいるとされる。『無量壽經』類によれば菩薩やすでに往生した者のうち、とりわけすぐれた人たちだけとある。したがつてこの世で悪をなした人が「上善人」となるには、五百年という長い時間を経る必要が

あるという。『法華経』では次の三個所に認められる。

1 「妙音菩薩品」

まさにその娑婆世界において、その妙音菩薩大士は、これほど多くの姿形を化作して、この「正しい教えの白蓮」という法門を衆生たちに説くのである。しかもこの善き人の神通力が滅するわけでもなく、知恵が滅するわけでもない。良家の子よ、妙音菩薩は、これほど多くの知の輝きによって、この娑婆世界で知られて

いる。

この妙音菩薩はかくの如く種種に変化し、身を現してこの娑婆国土に在りて、諸の衆生のために、この経典を説くも、神通・変化・智慧において、損滅する所なし。この菩薩は、若干の智慧をもって明らかに娑婆世界を照らして、一切衆生をして各、知るべき所を得せしめ、十方の恒河沙の世界の中においても、亦復かくの如し。²⁰⁾

ここでは「菩薩」を「良き人」とする。

2 「観世音菩薩普門品」

そこで、無尽意菩薩大士は、幾百・千（金）に価する真珠の首飾りを自分の首からはずして、観世音菩薩大士に供養の品として贈って、「善き人よ、この供養の品を私からお受け取りください」（²¹⁾）。しかし彼は受け取ろうとしなかった。その時、無尽意菩薩大士は観世音菩薩大士にこう言った。「良家の子よ、あなたはこの真珠の首飾りを私たちに慈しみを示して受け取ってください」。

無尽意菩薩は、仏に白して言わく「世尊よ、われ今、当に観世音菩薩を供養すべし」と。即ち頸の衆の宝珠の瓔珞の価、百千両の金に直するを解きて、以て之を与えて、この言を作す、「仁者よ、この法施の珍しき宝の瓔珞を受けたまえ」と。時に観世音菩薩は肯えてこれを受けず。無尽意は復、観世音菩薩に白して言わく「仁者よ、我等を愍れむが故に、この瓔珞を受けたまえ」と。²²⁾

ここでは無尽意菩薩から観世音菩薩への呼びかけとして「良き人」「在家の子」の語が当てられる。

3 「妙莊嚴王本事品」

良家の子らよ、このように、（これら）薬王と薬上菩薩大士は思慮を超えた功德をそなえ、幾百千万億もの多くのブツダのもとで善根を植えてきたし、この二人の善き人びとは思慮を超えた徳性をそなえていて、この善き人びとの名前を心に

とどめるであろうものたちはみな、神々をふくむ世間の人びとによって敬礼されるものとなるであろう。

この薬王・薬上菩薩は、かくの如き諸の大功德を成就し已りて、無量百千万億の諸仏の所において、衆の徳本を殖えて不可思議の諸の善き功德を成就せり。若し人ありて、この二菩薩の名字を識らば、一切世間の諸の天・人民も亦、応に礼拝すべし。²³⁾

ここでも二人の菩薩を「良き人」と呼称する。してみると、『法華経』でいう「良き人」はいずれも菩薩だけに適用されるから、往生者は誰であれ「良き人」の部類でなく、特定の菩薩だけに対する呼称ということになる。『無量寿経』では往生すれば「良き人」になれるけれども、『法華経』をも念頭に置くならば往生者すべてが「良き人」でないと考え得る。

天界と極楽

ところで『無量寿経』ではそれぞれの宮殿に天女は七千人とする。天界にいる天女の数について、たとえば『増一阿含経』では「十八億」、『フリタピスタラ』では「五千」²⁴⁾、「六万」、すでに示した『法華経』では「八万四千」あるいは「幾千万億」とある。いふならば無数である。しかるに七千人とされるのは何らかの意図があったと思われる。七という数は『リグ・ヴェーダ』を創ったのが七人の聖者とされ、仏教でもブツダ誕生時の七歩、マールヤ夫人は出産後七日目に生天と象徴的な意味で多用される。だからそれらと同じ思考方法に基因すると思われる。ともかく数を空想的な数でなく七千と特定する以上、天女と往生者とは異質な存在とみたと考えられる。もともとサンスクリット本には極楽では天人と人間との区別はないとするくだりがある。

もしも世尊よ、かのわたくしの仏国土において、ただ世俗の言いならわしで神々と人間という名称で呼んで仮に表す場合を除いて、神々と人間たちとを区別するようであれば、その間は、わたくしはこの上ない正しい覚りをさとりません。²⁵⁾

我れ仏とならん時、人民ありて我が国に來生する者、天人と世間人と異なりあらば、我れ仏とならず。²⁶⁾

設し我れ仏を得んに、國中の人天、形色同じからずして好醜あらば、正覚を取らじ。²⁷⁾

若し我れ仏と成るに、國中の有情にして形貌差別ありて好醜あらば、正覺を取らじ。
〔大宝積經〕

とあり、『平等覺經』『無量壽經』『大宝積經』のいずれもが容貌の美醜をとりあげている。してみるとサンスクリット本も極樂では天と人がまったく同一というわけではなく、美醜の差異などはないことを意図するとみるべきであろう。

極樂を構成する諸要素といえは、バラモン教という天界からの借用がよほど多いのも確かである。その例は枚挙にいとまがないが、若干のものをあげればこうである。²⁰⁾

・また、実にアーナンダよ、これら諸大河の兩岸は、種種の香りのある寶石の木々で覆われており、それら(の木々)から、種々の梢・葉・花の房が垂れ下がっている。かしこにいる生ける者たちが、これらの河岸で、天の汚れのない快樂の戯れに耽りたいと欲し、かれらがその河に入るならば、欲するままに、水は足首の深さになる。

・かれらは、身体が飽満して、どのような香りの種類を欲しようと、まさにそのような天の香りの種類が、かの仏国土すべてにかおる。

また、実に、アーナンダよ、かの極樂世界においては、定まった時に、天の香水の雲から雨が降り、天の一切の色の花や、天の七つの寶石や、天の梅檀の抹香や、天の傘蓋・はた・幡が雨と降る。天の宮殿や天の天幕が支えられ、天の寶石の傘蓋が扨子とともに空中に支えられ、天の音楽が奏でられ、そして天のアプサラス(天女)たちが舞うのである。

これらだけからみても極樂を構成する要素がいかに天界説の影響を受けたかが知られよう。しかし基本的にも成立史的にも他界觀の上からも、極樂と天界とは厳然と峻別される。そのため天界の「天人」に比していえば、天界でない極樂への往生者は「天人」でなく「極樂(往生)人」ということになるう。

天女と往生人

サンスクリット本にみられる往生者のはっきり天女と歎び戯れることができるという一節はこうである。

かれらは、どのような宮殿、すなわち、(どのような)色・標識・形状、ないし高さと広さがあり、種種の寶石でできた十万の小塔で飾られ、種種の天の布で覆われ、美しい座布団を敷いた寶石の長椅子のある(宮殿)を欲しようと、まさ

にそのような宮殿がかれらの前に現われる。かれらは、これらの、意のままに現れた諸宮殿の中で、それぞれ七千人のアプサラス(天女)にとりかこまれ、恭敬され住し、戯れ、悦び、楽しむのである。²¹⁾

ここでの「かれら」(20)とは往生人にほかならない。しかしながら康僧鑑訳『無量壽經』の第三十六願によると、極樂はつねに梵行つまり禁欲を修めるところとされる。

たとい、われ仏となるを得るとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界のもろもろの菩薩衆、わが名字を聞きて、寿(いのち)終りてのち、常に梵行を修し、仏道を成ずるに至らん。もし、しからずんば、正覺を取らじ。²²⁾

ところがこの漢訳本のくだりはサンスクリット本には存在しない。そこで漢訳本でいう第三十六願を極樂にいる生きとし生ける者全体に拡大解釈すれば、天女といえども謹慎中で梵行を修めねばならないことになる。中村元氏は極樂の天女について、「下界の女人のように争つたり、嫉妬心を起こしたりするような女人はいない。そこに居るのは、美しく、すがすがしい天女である。そして常修梵行だから、一切欲情をはなれている」という。しかしながら天女は本来、官能的で妖艶な存在である。この点に關し『大毘婆沙論』には次のような記述がみられる。

契經に説く、「人に三事の諸天に勝ること有り。一、勇猛なること、二、憶念すること、三、梵行することなり。勇猛なることとは、謂く、当の果を見ずして而も能く諸の苦行を修するが故に。憶念することとは、能く久時の所作、所説等の事を分明了に憶念するをいふ。梵行することは、能く初めて順解脱分、順決択分等の殊勝の善根を植え、及び能く別解脱戒を受持するをいふ。²³⁾

ここでも人に比べて天女には梵行つまりさとりを求めるような禁欲の心構えが薄いと規定される。同じ『婆沙論』には、

諸天は妙欲に耽著するものなるをもて、入正性離生と得果と離染等の事に於て増上に非ざるが故なり。²⁴⁾

とあり、ここでも禁欲の心は劣る(皆無とはしない)という。極樂にいる天女はインド神話や原始經典にみられるように奔放妖艶で禁欲とは相反する存在と思われる。

それゆえサンスクリット本にみられる天女は本来のままの姿であり、したがって往生人も「天女にとりまかれ、恭敬されて住し、戯れ、悦び、楽しむ」と考えられる。「ここで戯れ、悦び、楽しむ」という表現は『法華經』で子供が玩具と「戯れ、悦び、楽しむ」²⁵⁾とあるのと同じ表現である。これに対し漢訳本『無量壽經』に従えば、天女は

禁欲順守であるべき往生人にとって所詮極樂の宝石や鳥と同じ無機質の存在とみねばならないことになる。

註

- (1) *Sukh* (A), 38.
- (2) *Eighteen principal upanisads*, vol.1. Poona, 1958, p. 303. 中村元『宗教と社会倫理』昭和三十四年、一九二—一九八頁。藤田宏達『原始浄土思想の研究』昭和四十五年、四九五—四九六頁。拙稿「仏教における香の歴史」(『仏教文化研究』第五十号、平成十八年)、四十九頁参照。
- (3) *Mbh*, 2.7.21. 上村勝彦訳『マハーバータ』筑摩学芸文庫2、二五八頁。
- (4) *ibid.* 3.44.29-32. 同訳、文庫3、一二七頁。
- (5) 『長阿含経』大正蔵一、一三二頁下。
- (6) 『立世阿毘曇論』大正蔵三十二、一八二頁中。
- (7) 『立世阿毘曇論』大正蔵三十二、一八五頁下。
- (8) 『大毘婆沙論』大正蔵二十七、二〇六—二〇七頁上。
- (9) *Saund*, 10.33.35, 36, 37, 44. 松濤誠廉訳『端正なるナンダ』、七五、七七頁参照。『華嚴経』大正蔵九、五五五頁中下。
- (10) 『雜寶藏経』大正蔵四、四七四頁下—四七五頁上。
- (11) 『淨土三部経』上、(岩波文庫)、一三二頁。藤田宏達訳『梵文和訳 無量寿経、阿弥陀経』、一四八頁参照。
- (12) 平川彰『初期大乘仏教の研究』三七六頁—三七七頁、藤田宏達「転女成男の思想」(国訳一切経月報、三蔵三十九、昭和四十六年) 参照。
- (13) *Sukh* (A), 18p. 『淨土三部経』上、(岩波文庫)、四十四頁。藤田宏達訳、六八頁参照。『無量寿経』大正蔵十二、二六八頁下。
- (14) 『大阿弥陀経』大正蔵十二、三〇一頁上。
- (15) *Saddhp*, 419p. 松濤他訳『法華経』一、二〇二頁参照。『妙法蓮華経』大正蔵九、五四頁中下、『正法華経』大正蔵九、二二六頁下、『添品法華経』九、一八九頁中。
- (16) *Saddhp*, 478. 松濤他訳、二五二頁。『妙法華経』大正蔵九、六一頁下、『正法華経』九、一三三頁中、『添品法華経』九、一九五頁上。
- (17) *Saddhp*, 478-479. 松濤他訳、二五二—二五三頁。『妙法華経』大正蔵九、六一頁下、『無量寿経』にみられる天女
- (18) 『正法華経』九、一三三頁下、『添品法華経』九、一九五頁上。
- (19) 拙稿「極樂往生者の日常生活——上——」(『大正大学研究論叢』第八号、平成十一年)、四十七頁—五十頁参照。
- (20) *Saddhp*, 434. 松濤他訳、二二六—二二七頁。『妙法蓮華経』大正蔵九、五六上中、『正法華経』九、二二八頁中、『添品法華経』大正蔵九、一九一頁上。
- (21) *Saddhp*, 446. 『妙法華経』大正蔵九、五七頁下、『正法華経』九、二二九頁下、『添品法華経』九、一九二頁中。
- (22) *Saddhp*, 470-471. 松濤他訳、二四五頁。『妙法蓮華経』大正蔵九、六〇頁下—六一頁上、『正法華経』九、一三二頁下、『添品法華経』九、一九四頁中。
- (23) 『増一阿含経』大正蔵二、七〇五頁下。
- (24) *Lal*, 91.96.
- (25) 拙稿「マヤー夫人の死とブツダ——実母と子——」(『大正大学研究紀要』第八十七輯、平成十四年)、四三—四七頁三参照。
- (26) *Sukh* (A), 11. 『淨土三部経』、三三—三四頁。藤田宏達訳、五八頁参照。
- (27) 『平等覚経』大正蔵十二、二八一頁上。
- (28) 『無量寿経』大正蔵十二、二六七頁下。
- (29) 『大宝積経』大正十一、九三頁中。
- (30) *Sukh* (A), 35, 37, 40. 藤田訳、九七—九八頁、一〇一頁、一〇五頁参照。
- (31) *Sukh* (A), 38. 藤田訳、一〇二頁参照。
- (32) 『無量寿経』大正蔵十二、二六八頁下。
- (33) 中村元『大乘仏教の思想』同選集(決定版)、春秋社、平成七年、七九〇頁。
- (34) 『大毘婆沙論』大正蔵二十七、八六七頁下。
- (35) 『大毘婆沙論』大正蔵二十七、八九三頁上。
- (36) *Saddhp*, 72.